

えくてびあん

4 立川と語ろう 立川に生きよう
APRIL 2000 EKUTEBIAN Vol.18 No.189



表紙の人 / 遠山陽子 (柏町) 撮影 / 細江英公

【山桜】

【ヤマザクラ】

学名：Prunus jamasakura sieb. ex Koidz.
バラ科の落葉高木。サクラの代表。本州宮城県以西、四国、九州に自生し栽培されるものもある。

立川では、玉川上水や根川べり、寺社林など、所々でヤマザクラの古木を見ることが出来る。

わが国では最も古くから観賞され、本居宣長が「敷島の大和心を人間はば…」と詠んだのもこの桜である。古くから人々に愛され、地方によってはその咲き方、散り方が農作業の目安となり、収穫の吉凶を占う役割も果たした。春の彼岸過ぎ、天候の微妙な変化に、ヤマザクラは敏感に反応してきたのだろう。そして、それに心を惹

かれる日本人の美意識は、今も昔も変わらぬものである。

さて、拙宅の樹木を語るのは少し気がひけるが、わが家には樹齢約八十年を経たヤマザクラが一本ある。歴史民俗研究家・三田鶴吉氏により「藤太郎桜」と命名されたこの木は、その名の通り、今年百三歳になり今なお畑仕事に余念のない父、藤太郎と共に生きぬいてきたものである。藤太郎が結婚した大正十三年の冬のこと。

武蔵野の雑木林に「くずはき（落葉集め）」に出かけ、ふと足許の幼木に気づく。「この木を結婚の記念樹にし、共に元気に生きぬこう」と持ち帰り、家の出入口のそばに植えたものだ。現在も樹勢は盛んで目通り二メートル、高さ約十メートルの立派な木になった。花開く頃には、毎年昔話にも花が咲く。



所在地：鈴木藤太郎さん宅
(富士見町3丁目)

山桜月上げてより蒼きかな

千代谷典子



この小さな窓から 世界が見える

読売新聞社立川支局・支局長 小堀日出春さん

小堀 実はこちらに来てからのどにポリ
ープができてしまってますね。ちょっと
つらいんですよ。矢川の方の名医を紹介
されて行ったら「できるだけしゃべらな
いように」と。今日もできるだけしゃべ
らないようにします(笑)。

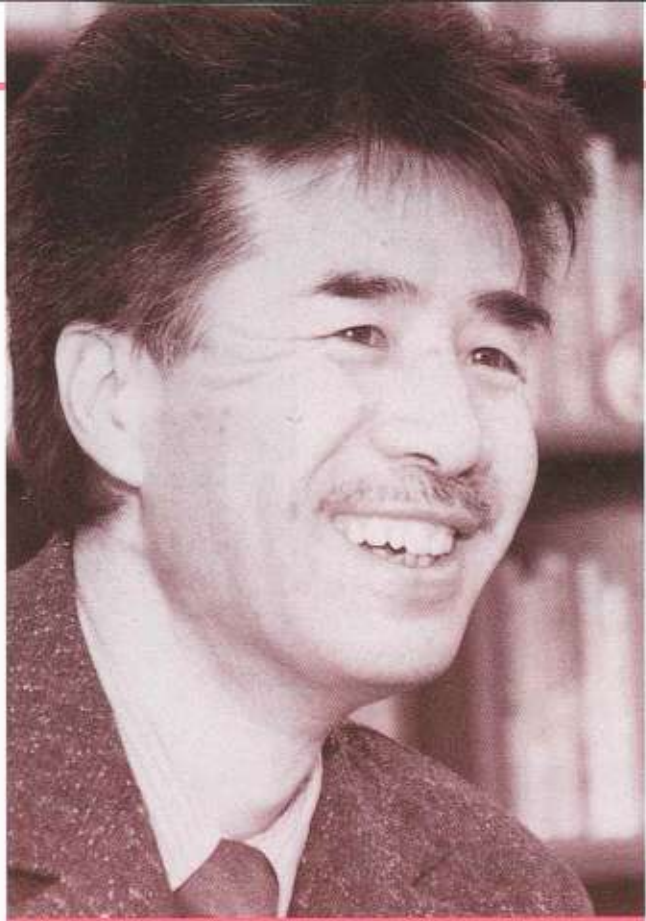
立井 それは大変ですね。でも、そうし
た中でも先日は青梅マラソンを走られた
そうですね。

小堀 10 走りました。40歳以上50歳未

満の部で290位でしたが、長距離は初
挑戦だったので、自分では「やった！」
という感じですね。

立井 ところで、小堀さんは政治部とか
社会部とかには所属していないの？

小堀 私は少し経歴が変わっていて、読
売新聞社に入る前にいろいろと経験して
いるんです。組織的にいうと地方部とい
うところに属していて、この前が沼津、
その前は前橋、秩父、浦和、下館……。



■小堀日出春(こぼりひではる) 読売新聞社立川支局支局長。昨年6月の社任以来、多摩に残る巨樹を訪ねた記事を通載、青梅マラソンにも参加するなど、多摩あるいは立川を中心に活躍している。大学在学中にイギリス留学、ヨーロッパ放浪などを終り読売新聞社に入った異色の経歴の持ち主。また、現在在籍3人のユニークな「世界種(ふんどし)普及協会」の一員でもある。もちろん、青梅マラソンで走ったときもランニングパンツの下は「氣」の文字を大書したこの日本古来の下着。
■立井浩介(たていひろまけ) えくてびあん編集人

立井 へえ、ずいぶん転勤があるんですね。ご家族も一緒ですか。

小堀 家族は実家のある栃木県にいますから、単身赴任のペテランというところですね(笑)。休みのときはなるべく帰るようになっていますが……。

立井 いろいろな土地に行く、むしろ東京にいるよりもよろしい？

小堀 ずっと人間的ですし、そこに住む人に関係する重要なニュースを担っている使命感がありますからね。私は読売新聞という一新聞の一人の記者にすぎないけれど、私のこの小さな窓を通して、この話題が世界に開かれていると思っっているんです。どこにしようかと、そこに人間がいる限りそこに誇りを持つて生きている人がいる。その人たちと人間としてつき合って、「どうだ、こんなことをやっているんだ、いいだろう！」というものを世界に発信できればいいですね。

立井 天職としての記者の誇りですね。立川に住んだら立川について「ここは俺のこのところだ」みたいな感覚は湧いてくるものですか。

小堀 新聞記者は住んだ以上はここがふるさと、というのはおこがましいけれど「ここ、いいところだな」と思いたいんです。その意味で、あちこちと動いてきていますけど、秩父と沼津は本当に濃密な人間関係ができたところなんです。秩父の人は地元にもものすごく誇りを持っていて仲間に入るのは難しいんですが、一度関係が作ればもう秩父人……。立



川ではまだそこまでいってませんが、ここに生活している人に会いたいから飲み屋さんにも行きます。本来は週5回のベイスなんですけど、のどを傷めて回数が少なくなっています……(笑)。

立井 僕は立川には「俺は立川人なんだ」と思っている人が他の街よりは多いと思っっていますよ。秩父にはかなわないかもしれなくて……(笑)。小堀さんのようなプロから見ると「えくてびあん」はど
小堀 「立川と語ろう 立川に生きよう」というのが好きですね。いろんなところに行っと思ってんですけど、住んでいるところについて「立川のここはいいよね」と、土地と向き合っって土地について語る人がいられるほど立川の魅力は増してくると思うんです。「えくてびあん」の

表紙も飾られた三田鶴吉さんなどは、立川に住んでこの街としっかり向き合っ
ている人物ですね。僕は三田さんの書
かれたものを読んで、友人達に「立川駅
からは東京で唯一地平線が見える」って
宣伝しているんです。

立井 いくらなんでも地平線は見えない
でしょう？

小堀 半分は冗談ですけど……。中央線
は25 真っすぐでしょ。視力5くらい眼
のいい人がいたら中央線から地平線が見
えるんじゃないかと思っただけです。そう
したら三田さんの書かれた文章で、三田
さんが子供の頃は立川駅の一番東側に立
つと中野方向に真っすぐな線路が見えた
が、トンネル工事か何かの影響で曲がっ
てしまったことに最近気づいたとあって、
昔は本当に地平線が見えたんじゃないか
という思いを深めましたね。自分の街に
ついて深く掘り下げられる人はすごいで
すね。ところで「えくてびあん」って、
とてもいい響きなんですけど実は意味がわ
からないんです……。

立井 フランス語で「よく聞いて下さい
よ」というくらいの意味です。

小堀 いいですねえ。「立川のことを聞
いて！」という人がいれるほどもつ
と魅力的になりますからね。「聞いて！」
と言う人はそれだけ語るものを持ってい
るわけですからね。そんな人にたくさん
会いたいな。

立井 僕はたまたま「立川」という区切
りで、しかも人物をモチーフに「えくて
びあん」をやっていますが、人間が何かを
発信しようとするには区切りが必要だと
考えています。例えば「文藝春秋」なら
その区切り、「サライ」や「暮らしの手
帖」という雑誌ならその区切りの中でや
つていく。新聞には新聞という区切りが
あり、大小は別に地域という区切りもあ
ります。内容を充実させるには区切りを
うまく作ることが大切で、区切らないと
いうのは幅広くいいように見えて、実
は空疎になるんじゃないかと思っしてい
ます。小堀さんの場合は「読売新聞」の中
でも「多摩読売」というのが一つの区切
りになるわけですね。

小堀 一面や社会面に書くこともできま
すが、立川、もう少し広げれば多摩とい
う場所が私の舞台ですね。

立井 区切りを大切にすることによって
深まるものってあるでしょう？

小堀 実はこちらに来てからあまり原稿
を書かなくてもよくなったんですが、「ニ
ッパチ」といって2月と8月はニュース
が少なく紙面がなかなか埋まらないん
です。それで8月に自分から手を挙げて
連載をしました。たまたま奥多摩の巨樹
に住んで巨樹を描き続けている71歳の絵
描きさんと知り合っっていたので「奥多摩
の巨樹」という10回連載だったんですが、
楽しかったですよ。一本の巨樹が残って
いるのには物語があっって感動するん
です。**立井** ロマンなんですよ。こう言っ
ては申し訳ないけど新聞記事にはあまりロ
マンがないでしょう？ 記者の人も何か区
切りをつけてそれを深めるしかないのに
広いことをやっている方がいいというこ
ろがあるんじゃないでしょうか。

小堀 デパートみたいに間口ばかり広い
ところはありますね。だからこそ、巨樹
のようなテーマにぶつかると本当にうれ
しいんです。私の場合、あちこちと動い
ていると、ある土地で面白いものを見つ
けても別のところに移るとよほど魅力が

強くないと関係が消えてしまう寂しさが
ありますからね。その意味でもインパ
クトの強いテーマに出会うと、その土地
が一段と魅力的になるんです。

立井 しかも自分でテーマを見つけて、
人間的な厚みを紙面にだせるという今
のお立場は一番いいじゃないですか。

小堀 そう言われたらもっと仕事をしな
くちゃいけません。事件事故の報道
も新聞の使命だけど、立川に住んでい
るからこそその魅力を引き出して書きたくな
ったな。若い記者にもっと飲み屋に行け、
人をもっと知れと言ってるんですけど、私
も早くのどを直してもっと人と話をしな
くちゃ。「何かについて知っている人を
知ってる」ということは、実は私たちの
仕事の上でもものすごく大事なんですよ。
語るものを持っている人、その土地を深
く知っている人と人間関係を作れたら、
私の今の立場で9割は成功なんじゃない
かと思っます。それが同時に記者として
の喜びでもありますね。

立井 立川にいい話をしてくれる人がた
くさんいることは保証しますよ。じゃあ
早速飲みに行きましょうか。

林 歯 科	羽衣町2-7-10 522-5657
中島豆腐店	羽衣町2-12-34 522-5732
珈琲屋らうむ	羽衣町2-27-9 526-3643
和風レストラン 蔦屋	羽衣町2-27-14 526-3698
フレッシュフルーツ立川商店	羽衣町2-30-6 522-3565
本・事務用品 泰明堂	羽衣町2-31-1 522-3353
文具のないう	羽衣町2-33-1 522-3677
赤松タバコ店	羽衣町2-42 524-7852
カフェべる・こむーね	佐橋町2-2-7 529-7800
味乃寿司 由	柴崎町2-2-8 522-3733
関田酒店	柴崎町2-2-18 524-2960
ピストロすぎ浦	柴崎町2-2-23 525-9929
ステーキ&欧風料理 クワトロ	柴崎町2-3-3 528-2993
casualrestaurant ラ・パンパ	柴崎町2-3-3 524-5800
キャノン01ショップ	柴崎町2-3-6 528-1501
コミュニティストアはなむら	柴崎町2-3-9 522-2491
不動産 ユウ都市企画	柴崎町2-3-13 528-2566
不動産 コマツホーム	柴崎町2-4-6 525-5811
喫茶キャリー	柴崎町2-4-7 528-2630
かみゆい処 わ	柴崎町2-4-8 522-8202

えくてびあんの輪
人があつて、街があります。
あなたがあつて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも、えくてびあん！

芹沢ガラス店	柴崎町2-4-8 522-3065
お茶・海苔 小室園	柴崎町2-4-8 522-2894
ファッションハウスホマレヤ	柴崎町2-4-15-1F 525-2788
カフェレストラン ホマレヤ	柴崎町2-4-15-2F 526-2894
焼きだてパンオーロール立川店	柴崎町2-4-15 527-9473
純中国料理北京大飯店	柴崎町2-4-19 522-6393
和食の店 ななや	柴崎町2-4-22 525-6980
田中星美堂薬局	柴崎町2-5-3 522-3913
特選しほ茶・海苔 菊川園	柴崎町2-5-6 526-2035
cafe COLORADO	柴崎町2-5-8 526-2285
マエダ文具店	柴崎町2-6-2 525-6584
スタジオ269	柴崎町2-8-10 527-0269
写真の エース	柴崎町2-9-2 523-0851
お食事処・飲み処 GOSAN	柴崎町2-9-27 528-2200
石原薬局	柴崎町2-10-3 523-4067
サイクルハウス 輪 輪 館	柴崎町2-12-17 522-8100
ビジネスHOTEL クボタ	柴崎町2-12-23 522-1122
いなげや立川南口支店	柴崎町2-12-24 526-2947
白洋舎立川諏訪チェーン店	柴崎町2-17-5 525-0036
ボックス しんあい	柴崎町3-1-1 527-6701

もうひとつの モノレールを造る人

今年1月、ついに全線開通となった多摩都市モノレール。
銀色の車体が滑走する姿は、街の風景としてすっかりお馴染みとなったが、
ここに、もうひとつのモノレールを造っている人がいる。
空き箱のボール紙やバルサ材など、身近な材料を使って、
1/80スケールのモノレール模型を拵えるのは石川甲子さん(柏町)。
生来の工作好き。地域の文化祭では必ず作品を出品し、その度に話題を呼ぶ。
このモノレールも一昨年の暫定開通の際には立川北駅に展示され、利用客の注目を集めた。
石川さんは元国鉄マン。創作の世界へ誘うのは、“列車”への一方ならぬ思いだろうか。



●立川市民文化祭にて。石川さんは市文化協会で事務局長を務めている。「これから駅舎や街並みを含めて、“小さな立川”を造ってみたいですね(笑)」



●モノレールなのに線路? これは何とか模型を走らせたいという石川さんの苦肉の決断だ。レールは鉄道模型の「Hゲージ」を採用している。

俳人。本名、飯名陽子。昭和32年より俳句結社「馬酔木」「鶴」を経て39年「鷹」の創刊に参加している。現在は三橋敏雄に師事しながら俳句界の第一線で活躍中である。

昭和57年に「六人の会賞」、また61年には「第33回現代俳句協会賞」を受賞。句集に「弦楽」、「黒鏡」、「連音」がある。「遠山」の名は「遠山に日の当りたる枯野かな」(虚子)にちなんで、ご尊父から戴いた号だという。現在、毎日新聞多摩版「文園」の選者としても活躍している。

(於・根川線通/撮影・細江英公)

東風

毎年、1月には当工房発の「ベスト立川人・展」が行われ、今年で15回を数えるが、これとは別に立川市地域文化振興財団が「コミュニティ奨励賞」を出している。今年も去る3月11日にその授賞式が挙行され、立川人18人がその栄誉に輝いた◆「ベスト立川人・展」が私設の賞であるとするれば、「コミュニティ奨励賞」は公のそれであることと云うことが出来ようか。その奨励賞の審査委員長に、本誌編集人があつていゝというのには幸運というべきか、天の采配というべきか。16万都市に、ここに人あり、と名指す程の人物はいないと視ている向きもあるようだが、そんなことはない、毎年、人材にこと欠かないのはわが街・立川の人的活性的の証とみてよいであろう◆世界的とか国際的とかいわれるが、畢竟、人間にとって大切なのは「近隣」ではなからうか。地域を愛せない者が、どうしてこの日本を、この世界を愛することが出来ようか。近隣の大切さを数えられたこの冬春であった◆小誌「えくてびあん」が思わぬ読者を獲得出来たのも、16万都市の市民意識の高揚であるに違いない。まだまだ力不足だが、市民意識高揚の一助になりたいという希いはまだ、ある。◆紅梅の月に暈あり えくてびあん

【第二次えくてびあん同人】
編 集 大久保清志/小林隆史/芳賀敏博/山田五郎
デザイン 池田隆男/AMNET DF
写 真 五来孝平/中村伸/井上善治

えくてびあん 4月号

第18巻 通巻189号
平成12年4月1日発行

発行 えくてびあん編集工房
〒190-0012
東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル3F
TEL. 042-528-0082 FAX. 042-528-0065

編集人/発行人 立井啓介
印刷 (株)大廣社

第7回えくてびあん杯争奪 立川ベーごま選手権

岩崎 泉選手 第2回戦A組 片桐由行選手
立川商工会議所・会頭 (有) さゆり商店・代表取締役

竹内洋介選手 第2回戦B組 長島勇二選手
蕎麦「無庵」店主 中華料理「五十番」シェフ



いよいよベスト8が出揃った「立川ベーごま選手権」。準決勝進出を決める2回戦の様子は、今月号と来月号で2組つづつ報告しよう。

まずA組。本選手権初戦で、立川市長・青木久選手を破った岩崎泉選手と片桐由行選手の対戦であったが、片桐選手のスケジュールが折り合わず残念ながら不参加。よって不戦勝で岩崎

選手の準決勝進出が決定。続くB組は、優勝候補の呼び声高い竹内洋介選手と、1回戦で鮮やかなコマさばきを披露した長島勇二選手の対戦。互いの間合いをとりつつコマを放る両者の姿に、観戦者から「これぞベーごま」の声がとぶ。結果はジリジリと確実にポイントを稼いだ長島選手の勝利。竹内選手は2回戦で涙を飲んだ。



真味百撰 紀の川

関西料理 柴崎町3-4-3 グルメータカオビル2階
525-5825 / 11:30~14:00, 16:30~22:00
日・祭日定休

伝統をふまえた新しい味 女性も重視し
いまや「友の会」2,500人



夜のセットメニューから「御所車」(2,000円)。寿司のほかに毎月代わる料理4品、吸い物、デザートと、内容、量とも充実。



立川駅南口に店を構えて20年。本格的和食の店という気後れしがちだが、『紀の川』は接待などだけでなく、気軽に和食を楽しみたい若い女性層をふくめてにぎわっている。

社長の原茂弘行さん=写真上=は関西を中心に8年間修業した後、郷里・立川で開店。店内の水槽を泳ぐ活魚料理と立川ではバイオニア的存在のふぐ料理が2本柱だったが、現在は斬新な創作料理がこれに加わる。創作料理には西洋料理や中華の食材も大胆に取り入れるが、原茂社長は「あくまでも和食の伝統をふまえながら新しい味に挑戦しています」。

女性客重視も特徴。酒の肴ではなく純粋に料理を楽しみたい女性は厳しい客層でもあるが、女性対象の「友の会」会員が2,500人を超えるあたりに支持の厚さがうかがえる。活鯛の半身を揚げ豆板醤入りの野菜あんをかけた「鯛のおどり揚」(1,000円)など、長年培った仕入ルートがあればこそその料金も魅力だ。

2,000円からのセットメニューや、「竹取」「伊勢」などみやびな名前の創作会席、おまかせ料理、ふぐコースのほか単品料理も。昼は一日30食限定の「松花堂弁当」(900円)も人気。

ゴロさんの独断毒語

五歳の頃

秩父の叔母が亡くなったという訃報がはいりました。享年、九十四。年令に不足はない、大往生と云ってよろしいでしょう。

しかし、私にとっては掛け替えのない大切な叔母で、単に「大往生」というだけでは済まされないものがあり、胸が痛みました。

私のうちは兄弟が多く、七人もいて、父母をいれると九人家族という大所帯でした。商家でしたので両親は毎日忙しく立ち働いており、子供の面倒がなかなか行き届かなかったために五番目の私は五つの頃に、秩父の祖父母のところへ預けられました。伯父、伯母もおりまして賑やかで、しかも和やかな家庭でしたが、いかんせん昔んな歳が離れ過ぎていて、遊び相手になつてくれる人がいないのです。

近くに住んでいた久喜さんの家によく遊びに行きました。久喜の叔父さんは織物を業としておりましたが、とてもモダンな人で朝、散歩に行くのに馬に乗って颯爽とヒズメの音高く悠々と行くのです。私の五歳の頃は、大きくなったああいう風にしてみたいと憧れていたものでした。久喜さんの奥さんが私の母の妹にあり叔母になるわけです。久喜さんの家には二

人の女の子がいて、礼子ちゃんと呼んでおりました。彼女たちと遊んでもらうのが私の毎日でした。

久喜さんの家は庭が広く、一面が芝生なので。緑圃から裸足で芝生におりて遊んでも叱られるということがありませんでした。久喜の叔母さんが優しい人で、私たちが芝生で遊んでいると、——ゴロちゃん、おやつ時間ですよ。こう呼ばれて、礼子ちゃん、靖子ちゃんと一緒におやつをいただくのがなんとも愉しみだった

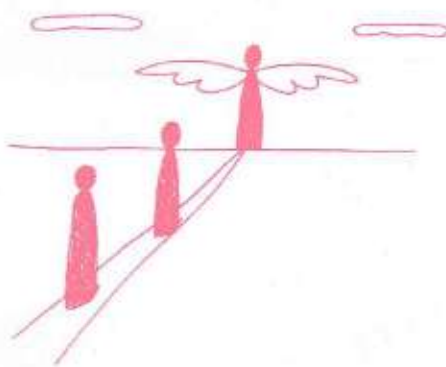


イラスト 藤 幸子

のです。あの、優しい叔母さんが亡くなってしまった、私はとるものもとりあえず秩父に駆け付け、通夜の席で幾度も目頭が熱くなりました。その日に帰ろうと思つて来たのですが、叔母さんから受けたご恩を想うとどうしても腰が立たず、秩父に一泊して告別の儀にも参列させていだきましたが、そのあいだ中、五つの頃を幾度も反芻しておりました。その頃、私は泣き虫であつたようです。

いつの間にか中島みゆきさんの「五才の頃」という歌を繰り返しておりました。

時は流れ過ぎて 大人になって
涙流しながら 泣けなくなった
思い出してみたら 悲しくなつて
泣きだそうとしても 泣き顔がない

人生を幼年期、少年期、青年期、壮年期、老年期と別ければ五分の一は「幼年期」にあたるわけで、その時期の幸せは天から与えられたものとしか思えません。

今、お元氣なのは靖子ちゃんだけです。彼女と「五つの頃」の懐い出をしみじみと語りました。叔母さん、本統にありがとうございます。(やまだこらう・詩人)

燕雁代飛
読み方は「燕雁、代わり飛ぶ」。緑が萌えだす春になると、雁や鴨といった鳥は北国に去り、南の国で冬を越していた燕が空を舞う。また、秋の深まりを感じる頃になると燕たちは姿を消し、雁たちが



立川に育てられて六十四年
真如苑
柴崎町1-2-13 Tel. 527-0111(代)

さくらは、新しいカタチの銀行へ。

さくら銀行

立川支店
〒190-8690 立川市曙町2-6-11
Tel 042-522-2151

デジタルえほん

メモリーブックにどうぞ...

ミッキーやキティちゃんと一緒に...!!
あなたの写真と名前が絵本の中に入ります。

PLANNING・DESIGN・PROCESS・PRINTING
大廣社 042-527-1911
〒190-0022 東京都立川市錦町5-17-13
FAX. 527-1949
E-mail J005215@entry.ne.jp

二〇年近く前、志を同じくする仲間たちと『ノイハウス』というクラフト集団を結成していました。ちょうどその頃に、埼玉県川口市の新しい街づくりへの参加を呼びかけられ、様々な表現分野で活躍する仲間と一緒に、幾つかの作品を手掛けました。この「ドンキホーテの時計台」はその一つです。

無駄だとわかっていても、馬鹿にされても、たった一人で大きな脅威に立ち向かうドンキホーテ。哀愁感漂う物語ですが、私たちが彼の姿に惹かれるのは、彼の持つ夢を見る力への憧れがあるのでしょうか。かつて「キューボラのある街」と呼ばれた街。そこが生まれ変わるうとする場面に立ち合い、再開発とは何だろう、街づくりとは何だろうと、このドンキホーテと一緒に考えました。

この後、僕はスペインに発ち、ガウディの仕事を訪ねることになります。その意味では、今の僕の原点ともいえる作品です。

(1984年制作・赤川政由)

赤川作品

十二撰 9

「ドンキホーテの時計台」

埼玉県川口市

